

2017年6月4日川越教会

礼拝する恵み

【聖書】 ローマの信徒への手紙12章1～2節

こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

{序} なぜ日曜日に

私たちは、日曜日に始まり、土曜日で終わる一週間を暦の単位として、生活しています。学校や役所、そして多くの職場は日曜が休日で、ゆっくり休息をとり、月曜から金曜、ないし土曜まで懸命に学んだり、働いたりしています。一週の働きに備えて心身の休息をとる日曜日は、貴重な一日です。

その日曜日に、皆さんはこのように教会に集り、礼拝及び教会の諸行事に出席されています。牧師の私は金・土・日曜が一番忙しい勤務の日。そこで月曜にホッと休息。働き始めている皆さんに申し訳ない思いをしながら過ごしています。では皆さんは、休息の日の日曜日に、遠方からでも、時間をかけて教会に足を運び、なぜ、礼拝を守っておられるのでしょうか。

[1] なすべき礼拝とは

パウロはローマの教会に宛てた手紙で、こう勧めています。「**自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。**」

旧約聖書に記されているイスラエルの民は、6日間働いて、7日目を**安息日**として、会堂に集って集會を守る以外は、遠出することも避けて、休息の一日を過ごしました。それは、旧約聖書の冒頭に記されている、**神の天地創造**の記事に由来しています。皆さんもよくご存知でしょう。混沌として闇が覆っていた世界に神は先ず「**光あれ**」とおっしゃいました。そして第六の日に、ご自身をかたどって人間を創造して、**御業を完成**され、第七の日に、すべての仕事を離れて**安息**なさいさいました。そこで日常の生活から離れ、万物の主なる**神を覚えつつ休息をとる日**として、**安息日**が守られるように、なったのでした。

また神殿に向いて礼拝を守る時には、生活の糧として飼育している動物の中で**最も良い物**を選んで、**いけにえ**として捧げました。祭司はその動物から**血**をとり出して祭壇に注ぎ、**体**を焼いて煙を天に上らせます。そして祭司の聖書朗読を聞きつつ祈りをささげて礼拝したのでした。祭司によっていけにえの**命の座**である血を祭壇に注いでもらうことで、**自分自身を神に捧げる信仰**を表わしたのです。**礼拝の目的**は、1. 神への感謝と尊敬 2. 神との交わり 3. 自分の罪の贖いでした。

そこでパウロは「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」と言ったのでした。では自分の体を神に喜ばれるいけにえとして献げるとは、どういうことでしょうか。

それが2節の言葉です。先ず「この世に**倣ってはならない**」。この言葉は、「妥協してはならない」(口語訳)、「調子を合わせてはいけません」(新改訳)、「自分をこの世に同化させてはならない」(フランチェスコ訳)、「この世と同じ姿かたちにさせられてはならない」(青野訳)と、聖書によって、色々に訳されています。

次に「この世」。私たちが今生きている**現代**ですね。キリストが再び来て最後の審判をなさる**世の終わり**が近付いているけれども、今はまだ現実となっていない時代です。しかしキリストの再臨を信じて待つ私たちは、この**来るべき世**を見つめつつ生きているのです。この世の人々の生き方、やり方に自分を合わせていると、**心まで変えられてしまうぞ**、という警告です。

「むしろ**心を新たに**して自分を変えていただき」。口語訳では「心を新たにすることによって**造りかえられ**」新改訳では「**心の一新**によって自分を変えなさい」青野訳は「自分の思いを**刷新**することによって、**形造り直され**、その結果何が神の意志であるか、吟味するようにしなさい」。即ち、神によって**自分の内部革新**を受け、その新しい生き方の素晴らしさを、**実際に証明しなさい**という勧めです。

私たちの多くは、自分でよく考え、反省し、行動しています。重大な問題に直面した時には、しかるべき人の助言を受けるとしても、最後は**自分の決断**です。ですから**自主自立**——これが私たちの受けている**教育の第一目標**ではないのでしょうか。しかしパウロはここで、そのような生き方に倣ってはいけなと断言します。何が神の御心であるかを**神に聞くことを第一**にしなさい。そのために**心を新たに**して自分を変えていただきなさいと勧めているのです。

私たちは何故、礼拝を大事にするのでしょうか。つい**自分第一**になってしまう私の心を刷新して、変えていただく。そして**神の御心**に従って生きてく——その**原点に立つ**ことが私たちの礼拝なのだ、パウロはローマ教会の皆に語っているのです。

[2] 神の啓示・十字架と復活

では**見えない神**の心を、私たちはどのように聞くのでしょうか。特別な**霊的能力**を与えられた**霊能者**の許に、大勢の人が集まり、その人から神のお告げを聞き、また病気を癒してもらっています。そのような宗教集団がよく話題になります。でも聖書には、このような言葉が記されています。ヨハネ福音書14章です。

弟子のフィリポが言いました。「主よ、私たちに**御父をお示し**下さい。そうすれば満足できます」「フィリポよ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。**わたしを見たものは、父**

を見たのである」。ヨハネは福音書の冒頭でもこう言っています。「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神をしめされたのである」(1:18)。

神が人間の姿を持ち、この世に生きる私たちにご自身を現してくださった——それがナザレのイエスです。私たちと同じ人間になって下さったのですから、神本来の在り方とは違います。ですから主イエスはご自身を神の子と言ひ、本来のお姿をしておられる神を父なる神とおっしゃったのでした。

ではナザレのイエスとなってこの世にご自分を現してくださって神が、その生涯のどこで、父なる神を最もよくお現しになったか——それが、十字架の死と復活です。弟子たちが、そしてパウロが世界中の人々に宣べ伝えた福音の中心も十字架の死と復活です。そしてその証の言葉が、新約聖書として文書化されました。ですから私たちは、聖書を読みつつ、十字架と復活の主イエス・キリストを救い主と信じて、礼拝しているのです。

では神はどうして、キリストを十字架に架けることを、よしとされたのでしょうか。先日も申し上げましたが、大切ですので、もう一度繰り返して述べさせていただきます。それは神が、キリストを十字架に架けることによって、私たち全ての人間の罪を処罰なさったからです。この世の法律でも、無実の人が裁判で有罪とされて処刑されますと、後で真犯人が現れても、彼はもはや処罰されません。彼の罪に対する処刑は終了しているからです。

こうして「わたしはあなたの犯す罪の一切を十字架で処罰した。あなたはもう赦されている」という神の赦しの宣告を聞き取り、悔い改めて、神の許に帰ってくるようにと、私たちは呼びかけられているのです。パウロ自身が告白しているように、善をなそうとする自分と、罪の奴隷になっている自分が葛藤して、悪に負けてしまう惨めな私の中には、死と滅びこそあれ、互いに愛し合い、助け合って人生を全うする喜びの展望はありません。しかし神の救いの招きに応えれば、変わってくるのです。

また、イエス・キリストは十字架で息を引き取り、死者として墓に葬られました。しかし神は、彼を復活させて、死を生に変える神であることを現わされました。パウロは言っています。「もしイエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてください」(ローマ8:11)。死を生に変える神の霊の働きが、私たちの内面の死を生に変えて下さるのです。

ですから私たちは、パウロが言うように、自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして神に献げて、礼拝するのです。心を新たにしてお自分を改めていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかを、わきまえるようになっていこうとするのです。

[3] 聖霊の働き

私はここで、日本が朝鮮を植民地支配していた1919年に、日本軍の一小隊が**提岩里**という農村で行なった**虐殺事件**と、その後についての証をさせていただきます。教会に農民21人を閉じ込めて放火・銃撃し、夫の身を案じて教会に駆けつけた女性2人を庭先で殺し、さらに天道教信者宅二軒の男性6人と、**合計29人を虐殺した**のです。

この提岩里に戦後初めて訪れたのが**尾山令二牧師**でした。尾山師は、戦後20年 たった**1965年**に大学生を連れて韓国を訪問した時、**提岩里**に案内されました。新婚早々の夫を殺された2人の老夫婦に会うことが出来ました。一人は信仰を持ち続けて提岩教会の長老をしている**田同禮さん**(72才)で、お詫びに来たと伝えると、家から出てきて、涙ながらに当時の模様を話してくれました。謝罪の言葉をハンゲルで記して署名したカードを手渡すと、**握手**してくれました。

もう一人の**お婆さん**は、クリスチャンだから殺された**と信仰を捨ててしまい**、キリスト教大嫌いになった由。「日本人なんかここへ来るな。早く帰ってしまえ。見るのも嫌だ。わけなく父ちゃまや夫を殺した。返してくれろ。さあ、とっとと出て行け。」と初めから終わりまで、怒鳴り続けたそうです。取り付くしまのないお婆さんを後にして、みすばらしい小さな教会堂に入り、学生たちと皆で**祈り合**いました。

「この事件は、36年間にわたる日本の植民地支配の**象徴的事件**ではないか。せめてこの会堂を日本人の手で再建することで、**せめてもの償いと謝罪**の表明となるのではないか」。祈りの中でこう示された尾山師は、帰国後、提岩里教会のS牧師に何度も手紙を書いて、了承を求めました。最初は**頑強に拒否し続けた**S牧師も、遂に尾山師の心を理解し、申し入れを受け入れて下さることになりました。

1967年12月に募金の発起人会を作り1968年から広く募金活動を行い、一年余で**1000万円**の募金を達成。**1969年4月15日**、50年の節目に**起工式**を行ないたいという韓国教会側の希望で、尾山師らが現地に出向きました。ところが4キロ手前の町で突然、尾山師ともう一人の日本人だけ車から降ろされ、薄暗い喫茶店に連れていかれました。

教会建設反対を叫ぶ遺族たち 100人近くに取り囲まれ、怒号の飛び交う中で数時間を過しました。しかし韓国の教会側は尾山師抜きで起工式を行なってしまいました。反対派は烈火の如く怒りましたものの、やがて軟禁を解き無事救出されました。それから**一年間の交渉**で、遂に遺族会側が折れ、1000万円の半分で**教会が会堂を建て、半分で遺族会が記念館を建てる**ことで決着。1年半後の1970年9月に工事が完成しました。

献堂式の前に水源の町に、一番激しく反対した**遺族会副会長**を訪ねると、彼は何と「**去年のことはすべて忘れて下さい**」と**握手**を求めてきたのです。喫茶店に数時間も軟禁して激しく怒号していた人のこの**変わりよう**に、尾山師は思わず熱い思いが込み上げてきて、目まいがしたそうです。「**神さま以外に一体誰がこのようなことをなしうるでしょうか**」。この遺族会副会長の案内で提岩里の集

落に 5回目の訪問をし、遺族の家々を訪問して回りました。

最初に来た五年前に、狂わんばかりに怒りをぶちまけた**老婦人**は、何と副会長の母親でした。彼女もうつ向きかげんに手を差し出して、**堅い握手**をしてくれました。しかも「**牧師様、ありがとうございます**」と日本語で言ってくれたのです。尾山牧師はこう語っておられます。「もしも軟禁されずにすなりと教会堂が建っていたとしたら、遺族たちの**心は閉ざされたまま**で、永久に開かれる機会はなかったでしょう。昨年あれほど反対してくれたからこそ、かえって遺族の**心は開かれ、真の謝罪**の実が実ったのです。人間の思いを超えた神さまの思いを知らされ、讃美が心に溢れました。」

[結] 礼拝を守り続ける

深い**怒りと憎しみ**の心を赦しに変え、**和解し合う**驚くべき**変化**、これは私たち人間のよくなし得る業ではありません。これこそまさしく、あの十字架の主イエスに溢れる**神の愛の霊、聖霊の働き**に外なりません。この聖霊を**私たちもまた**、主イエスを私の救い主と信じることによって、**頂いている**のです。

それにしても父と夫を殺された婦人の心が赦しに**変えられる**のに、**聖霊の働きが5年間も必要**だったのです。聖霊は**打ち出の小づち**とは違いますね。**私たちの罪**はそれほど深いものなのです。だからこそ、**私たちは礼拝を続けなければなりません。熱い祈りを続けなければなりません。**

私たちのどんな罪をも赦し、愛し合って共に生きる者にてくださる主イエスの**霊、聖霊の働き**を、**絶えず祈り求めていく者**になりましょう。**礼拝を共に守り続け、励まし合って、愛に生きる者**になっていきましょう。

祈ります：救い主イエス・キリストとなつてご自身を私たちに現して下さった天の父なる神さま、あなたの尊い御名を、心からほめたたえます。今日もこのように兄弟姉妹ともども、礼拝を捧げることが出来ていることを、心から感謝いたします。十字架にかかりあのよう
に苦しみつつ、私たちの受けるべき罪の一切を引き受けて下さった主の恵みに、深く感謝
いたします。あなたは死を生に変える力をもつ聖霊を、信じる私たちにお与え下さいました。
あなたの御心を絶えず求めつつ、互いに赦し合い、愛し合って生き続ける者にして下さい。
殺し合う争い、戦争を止めさせてください。平和をお与えください。救い主イエス・キリス
トの御名によって、祈ります。 アーメン